二人の匠「キーシン&フレミング」リサイタル

現在世界ツアー中の意外なコンビ、エフゲニー・キーシン（P）とルネ・フレミング（S）を、KKL（ルツェルン・カルチャー・コングレスセンター）で1月23日に聴いた。2月7日に始まる新ピアノ・フェスティヴァル「ピアノ・シンフォニック」の一環で実現された夢の共演に、ファンはわくわく、空席も目立つ。

明るいえんじ色のドレスにまとめ髪のフレミングは、しっとりとシューベルト歌曲を歌い始めた。ドイツ語の単語としてはまとまらないが、各音では適所にはまっている。《糸を紡ぐグレートヒェン》など遅いテンポでも完璧に息を操り、すばらしいドラマに仕上げた。

キーシンはリスト「巡礼の年第2年《イタリア》」から〈婚礼〉を指に吸い付くような音で弾く。暴力的な強打もあったが、羽毛のような音などすべてが特別だ。リスト《忘れられたワルツ》は転がる玉のようでトリルも軽やか、無重力の世界に引き込まれた。その興奮も冷めやまぬままリストの歌曲に移ったが、最後の《ラインの美しき流れに》など後奏が圧巻で、歌とピアノ別々に集中して聴きたいというジレンマに駆られた。

しかし後半のラフマニノフは、フレミングのピカピカ光り過ぎるドレスに象徴されるように深みがない。キーシンのソロ曲も譜読みしているかのようだった。最後のデュパルクの歌曲は比較的よかったが、アンコールのシューベルト《アヴェ・マリア》では前半のような匠の技が戻ってきた。ラフマニノフ《春の朝》のあと、R・シュトラウスの《明日！》では、キーシンの前奏がこの曲独特の浮遊感を妨げたものの、フレミングは余裕で小宇宙を作り上げた。スターソリストの共演は、彼らの技術や限界、相乗効果などが見える稀有な機会だった。

ルツェルンで開かれたキーシンとフレミングのリサイタルから ©Philipp Schmidli

バーゼル劇場《リゴレット》

バーゼル劇場は、時として驚くほどレヴェルの高いプロダクションを生み出すことがある。2009、2010年と連続で『オーパンヴェルト』誌の最優秀歌劇場に選ばれ、2013年には初来日した。1月21日にプレミエを迎えたヴェルディ《リゴレット》も粒ぞろいの歌手を集めたのには驚いた。ヴァンサン・ユゲの演出は斬新な解釈で、ヴィクトル・ユーゴーの救いのない悲劇を、リゴレットに引き離されて破局したティーン・エイジャーの悲恋物語に変えてしまったが、現代の私たちには妙に説得力がある。

レグラ・ミューレマンが歌うジルダが目当てだったが、マントヴァ公爵のパヴェル・ヴァルズィンも大器を感じさせる美声、マッダレーナ役のナターリア・クハルも適役、題名役のニコロズ・ラグヴィラヴァは声も伸び、感情の込めかたも絶妙で、久しぶりに涙を誘われた。スパラフチーレとモンテローネ以外は小さな役も充実していた。

残念なのは指揮者、ミケーレ・スポッティで、これだけよい歌手たちを生かせていないが、歌手陣は動じず健闘した。舞台装置も衣裳も安っぽいのだが、回り舞台の使いかたは秀逸だ。角度によってドアにも外壁にもなり、マントヴァ侯爵邸にもリゴレットの家にもスパラフチーレの小屋にもなる。この演出は「低予算でも満足させるオペラが作れる」好例だ。

チューリヒ歌劇場《トスカ》再演（後半）

先月号にはヨナス・カウフマンがカヴァラドッシとしてチューリヒ歌劇場に戻ってきたプッチーニ《トスカ》をレポートした。最後の公演はキャンセルしたが、ヴィットリオ・グリゴーロが代わったのもぜいたくだ。そのあとは稽古から参加していたユシフ・エイヴァゾフの出番となり、最終日の1月4日に所見したが、声楽的には予想以上のできだった。カヴァラドッシの周りは変わらずソンドラ・ラヴァノフスキーのトスカとブリン・ターフェルのスカルピアなので、演劇的にはカウフマンと比べてしまい、灯が消えたような印象で始まったが、それを補うかのようにターフェルはどんどんテンションを上げていく。エイヴァゾフのカヴァラドッシは2年半前にザルツブルク音楽祭で聴いたが、妻のアンナ・ネトレプコと歌うときより野生的な今回、イタリア的な響きを持つカヴァラドッシと野獣的なスカルピアを得て、ようやく《トスカ》らしい公演に出合えた満足感に酔った。

トーンハレでの公演

多和田葉子が細川俊夫のために、「浦島太郎」を題材として書き下ろした作品《遠くから来た友だち》は、昨年12月4日にフィルハーモニー・ルクセンブルクで世界初演されたが、1月8日は初演と同じサロメ・カンマーの一人芝居に、石橋幸子らトーンハレ管弦楽団員のアンサンブルが楽器の紹介なども行い、ハイ・レヴェルな子供向けイヴェントとしてスイスの子供たちを惹きつけた。

チューリヒ・トーンハレ管弦楽団としては1月18日にトゥール《ルクス・ステラルム》をエマニュエル・パユのフルートで聴いた。その熱気に反して、後半のメンデルスゾーン「交響曲第2番《讃歌》」では珍しくパーヴォ・ヤルヴィの棒が空滑りする印象を受けたが、テノールのパトリック・グラールの美声、チェン・ライスとマリー＝ヘンリエッテ・ラインホルトの女声の端正な歌唱、チューリヒ・ジング・アカデミーの合唱で美しく締めくくった。